

二つの顔を持つ男——“Pen, Pencil, and Poison”における Wainwright 像分析

高山蒼馬

Oscar Wildeは“Pen, Pencil, and Poison”で、毒殺や文書偽造などの犯罪行為に手を染めた一方で文人としても活躍したThomas Griffiths Wainwrightの伝記的事実を扱った。“Pen, Pencil, and Poison”は彼の伝記的事実に関していくつもの文献を参考にしているが、W. Carew HazlittがWainwrightの雑誌への投稿記事などを編集した*Essays and Criticisms*の影響が、最も大きい。本発表では、Wildeが“Pen, Pencil, and Poison”で描くWainwright像をこの*Essays and Criticisms*と比較することで分析し、Wilde自身が描き出すWainwrightに「隠された二面性」を付与しようとしていたことを明らかにする。この「隠された二面性」とは、Dorian GrayなどのWilde作品の他の殺人を犯す登場人物たちも持つ特徴である。Wildeの描くWainwrightも、犯罪行為に手を染める者と文人や画家といった芸術に携わる者という立場を両立させていて、Wainwrightはロンドンでの逮捕以前にはその二つを巧みにこなしているように描かれている。ところが、Wainwrightは流刑後には絵画を書き続けているものの、毒殺者としての手際の良さを失ってしまっている。これは逮捕によってWainwrightが罪人として認知され「隠された二面性」を保てなくなってしまうためと考えられる。本発表では、このように“Pen, Pencil, and Poison”におけるWainwrightの「隠された二面性」について検証する。

日本ワイルド協会第 48 回大会シンポジウム オスカー・ワイルドのオクスフォード

『獄中記』の言葉にしたがえば、オスカー・ワイルドの生涯における二つの大転機は、社会により監獄に送られた瞬間、そして父サー・ウィリアムによりオクスフォードに送られた瞬間であった。ケリー・パウエル、ピーター・レイビー編『コンテクストのなかのオスカー・ワイルド』（ケンブリッジ大学出版会、2013年）の第一部は、同じシリーズの他の多くの巻と同様、作家にとって重要であったトポスを一つずつとりあげ、この〈場〉と作家のかかわりを論じる構成となっている。ジェルーシャ・マコーマックは「ワイルドのダブリン、ダブリンのワイルド」と題された章を、リオン・リトヴァクは「アメリカの唯美主義者」、マット・クックは「ワイルドのロンドン」、ジョン・ストークスは「ワイルドとパリ」をそれぞれ寄稿している。そんななかオクスフォードを割り振られたフィリップ・E・スミスが自らの章に与えたタイトルは「オクスフォード、ヘレニズム、男の友情」と例外的に扱う論点を具体的に特定したものだ。ここでオクスフォードは、ダブリンやパリより、ロンドンや北米大陸ぜんたいよりも広大な土地である。

したがって、シンポジウムのお題を「ワイルドのオクスフォード」と定めたところでほとんど内容を限定したことにはならないのであるが、登壇する四人の若手研究者がそれぞれの専門領域とのかかわりで自由な議論を展開できる余地を残しておくため、あえて狭めることはしなかった。オクスフォードに発する人的ネットワークを中心に、狭義の文学に限定されないヴィクトリア時代の知的世界に関心を持つ町本亮大と石川大智は、現在広く読まれているとはいいいがたい二人の著述家グラント・アレンとJ・A・シモンズをそれぞれ取り上げる。J・W・ウォーターハウスをはじめ19世紀イギリス美術を専門とする若名咲香は、『ドリアン・グレイの肖像』における感覚的快楽・古代ギリシア・美の結びつきに注目し、この小説をオクスフォードと関わりの深い画家たち——たとえばエドワード・バーン＝ジョーンズやフレデリック・レイトン——の唯美主義絵画を参照しつつ読み解いていく。ラスキン研究者の花角聡美は、ヴィクトリア時代の童話という一つの文学ジャンルの嚆矢ともいえるべき『黄金の川の王様』を再訪し、ジャーラス・キリーがアイルランド口承文学の伝統という観点から新鮮にアプローチしたワイルド童話をオクスフォードの文脈に引き戻して検討する。

オスカー・ワイルドとグラント・アレン

——世紀末文化批評の再検討

町本 亮大（上智大学）

1848年にカナダのキングストン近郊に生まれ、19歳でマートン・コレッジの^{オーストラリア}給費生としてオクスフォードで学び始めたグラント・アレンは、ワイルドの生涯においてとくだん重要な役割を演じた人物ではない。ワイルドが「社会主義下の人間の魂」を発表した1891年2月号の『フォートナイトリー・レビュー』には、英国芸術とケルトの関係について論じたアレンの文章が掲載されていて、ワイルドはこの論考を気に入った旨を伝える手紙を書いたことがある。「人間の魂」を読んだアレンも行き違いで筆をとって、この「気高く美しい評論」を称賛した。二人の唯一の明白な接点といえるこのやりとりがあるために、ワイルドの社会主義論がアレンの論考「個人主義と社会主義」（1889年5月号の『コンテンポラリー・レビュー』に掲載）にヒントを得たものだと考えるジョゼフィン・ガイの議論には一定の説得力がある。

しかし、アレンは科学ジャーナリズムとフィクション作品によって文芸市場で成功した著述家である。フィクションであれノンフィクションであれ、ワイルド作品とはより多岐にわたる結びつきを見出すことができるはずだ。本発表ではアレンのフィクションのうち、オクスフォードで教育を受けた副牧師の犯罪を描く1884年の短編小説「チャーンスайдの副牧師」（初出『コーンヒル・マガジン』；短編集『奇妙な物語』に再録）を取り上げる。遺言状を偽造し、おじを殺害して遺産を相続するウォルター・ディーンは、美的に洗練された人物——アレンの言葉にしたがえば、「イタリア・ルネサンス期の教養階級に珍しくなかった気質」の持ち主——であり、ワイルドの描いたトマス・グリフィス・ウェインライトを想起させずにはおかない。ワイルドの歴史的想像力のなかで、個性とルネサンスと犯罪が結びつけられていたことを考えあわせれば、アレンの犯罪ものや探偵ものを再訪することは、世紀末文化批評の地図に少しばかり手を入れることをも意味するはずである。

感覚的快楽と古代ギリシア

——ワイルド、ペイター、唯美主義絵画

若名 咲香（盛岡大学）

ウォルター・ペイターの『ルネサンス』（初版1873年）を通じて、感覚や印象を交えた批評が芸術の域に到達することを知っていたオスカー・ワイルドは、感覚的快楽とともに美を語る言葉を、長編小説『ドリアン・グレイの肖像』（1890年）に散りばめ

た。ワイルドの唯美主義を強うかがわせるこの作品では、主人公ドリアンの美貌は古代ギリシア神話の登場人物や古代彫刻に準えられた。感覚的快楽と古代ギリシアとが、本作品において美に結びついたのである。ワイルドはオクスフォード大学在学中、ペイターの講義や1877年夏のギリシア旅行等を通じて、古代ギリシアの美に接していた。唯美主義と古代ギリシアの連環は、ワイルドとペイターが出会ったオクスフォード大学に、その萌芽を見出せるだろう。

ワイルドとペイターが標榜した唯美主義は、19世紀後半のイギリス美術界をも席卷していた。唯美主義的作品を描いた画家には、たとえば、オクスフォード大学を中退したエドワード・バーン＝ジョーンズや、オクスフォード大学から贈られた法学博士のローブを纏う自画像を描いたフレデリック・レイトンなどがいる。本発表では、この二人をはじめ唯美主義と関わる画家たちの作品を取り上げたい。イギリス美術史研究において、唯美主義絵画をワイルドやペイターと関連づけ、影響を指摘する論考はこれまでもあった。本発表では従来の研究を踏まえつつ、より理解を広げるために、ワイルドとペイターが描出した感覚的快楽と古代ギリシアに着目し、この二つが美に帰結する様相を唯美主義絵画にたどってみたい。

ラスキンとワイルドの童話——「火」をめぐる一考察

花角 聡美（昭和薬科大学）

1874年にオクスフォード大学モードリン・コレッジに入学した際に、オスカー・ワイルドが嚆矢に接することを熱望した人物の一人がジョン・ラスキンであった。その時期にラスキンは初代スレイド記念美術講座教授を務めていた。ワイルドがラスキンの講義を聴講しただけではなく、ラスキン主導によるノース・ヒンクシー村での道路造りに参加したエピソードについても、よく知られている。

本発表では、ラスキン、ワイルド両者の童話作品に注目する。中でも中心に据えて考察するのは、ラスキンにとって唯一の童話作品である『黄金の川の王様』（1851）と「幸福な王子」（1888）であり、「火」と「溶鉱炉」をキーワードとする。ラスキンの『黄金の川の王様』では、黄金のカップを炉で溶かそうとしたところ、現れたのは溶けた金ではなく小人（王様）であった。一方ワイルドの「幸福な王子」では、王子の像を燃やそうとするも、鉛の心臓が溶けることはなく、鳥の亡骸と共に最も高貴なものとして神のもとへ献上される。いずれにおいても、火が溶かし切ることがないものが、王様であり高貴な心臓として描かれている。これら2つの作品から、両者が表す「火」を考察したい。

オクスフォードのコスモポリタンたち ——オスカー・ワイルドとJ・A・シモンズを中心に

石川 大智（慶應義塾大学）

ヴィクトリア朝期のパブリック・スクールがしばしばイギリス帝国の「遊戯場 (playing fields)」としての予備的機能を担っていたのだとすれば、当時のオクスフォード大学という空間もまた帝国主義的イデオロギー維持のための制度的中心の一つであった。しかしそれは同時に、その制度の中枢から逸脱したコスモポリタンたちの巢窟でもあった。19世紀前半にオクスフォード運動の中心となったオーリエル・コレッジに代わり世紀後半に新たな勢力を築いたベイリオル・コレッジは、スコットランドやドイツ哲学思想との密接な繋がり（例えばその縮図としての「オールド・モータリテイ」の活動）はもちろん、学寮長となったギリシア学者ベンジャミン・ジャウエットの影響を通して、スウィンバーンやペイターらを経由しつつワイルドへと至るコスモポリタンの唯美主義のための強力な知的磁場を形成した。

このような大学共同体の紡ぐ閉鎖的でありながら国際的でもある独特の知的ネットワークの実態は、そこで長らく教鞭を執ったラスキン、アーノルド、ペイターなどの文人批評家らの著述活動からのみではなく、それを外から眺める在野の作家たちの多様な業績を吟味することで初めて体系的に理解されるものでもあろう。その意味で、ジャウエットとの交友を続けながらもイギリスを逃れるようにヨーロッパ大陸へ渡りスイスのダヴォスで暮らした文人J・A・シモンズ (1840-1893) や、ダブリンからモードリン・コレッジに移りラスキンやシモンズや W・H・マロック同様ニューディギット賞を受賞したワイルドのような存在は、オクスフォードという特異な「空間性」の磁力とその限界を測る上での格好の比較研究対象となりうる。本発表では、同大学を巣立ったシモンズとワイルドという2人のコスモポリタン（異端児）の文学的キャリアの比較分析を通じて、ヴィクトリア朝時代のオクスフォードが振るった国家横断的な影響力の射程を実証的に示せればと思う。扱うテキストには、ワイルド宛のものを含むシモンズの手紙や『回想記 (Memoirs)』、ワイルドのシモンズ評などが加わる予定である。

法廷は踊る——オスカー・ワイルドと裁判

河内恵子

1895年4月5日から5月25日までに三度行われた、いわゆるオスカー・ワイルド裁判とは一体何だったのだろうか？ ヴィクトリア朝の常識がひとりの芸術家の創作力を奪う時空だったのだろうか？ 唯美主義やダンディズムの本質が徹底的に問われる機会だったのだろうか？ 同性愛と芸術の関係性について議論する場だったのだろうか？ どれも正しい。しかし、H. Montgomery Hyde、Michael S. Foldy、Merlin Holland、Joseph Bristow 等が執筆した、新旧のさまざまな裁判記録を読む度に私が惹かれるのは、ワイルド裁判の作品としての「面白さ」だ。この「面白さ」を伝えることを今回の発表の目的としたい。

一連の裁判をワイルド作、ワイルド演出、ワイルド主演の演劇作品ととらえた場合、彼はいかなる時点でそれぞれの役割を放棄していったのか？（あるいは剥奪されていったのか？） 裁判前、裁判中のワイルドの言動を具に検証することで、当時もっとも人気があったこの劇作家の心の動きと裁判という悲喜劇の諸相を探りたい。また、ワイルドの家族、友人、知人が裁判という演劇空間で担った役割やジャーナリストたちの報道姿勢や一般大衆の反応を見つめると、19世紀末のイギリスの在り方の一側面が鮮やかに浮かび上がってくる。多層性に満ちたワイルド裁判の演劇性について、この裁判をモチーフにして書かれた20世紀の演劇作品にも触れながら考察してみたい。